

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース
A グループ研究A
校園コード (代表者校園の市費コード)
531062

代表者	校園名:	野田小学校
	校園長名:	川辺 智久
	電話:	06-6461-0520
	事務職員名:	児嶋 桜子
申請者	校園名:	野田小学校
	職名・名前:	主務教諭 屋良 一輝
	電話:	06-6461-0520

令和8年度「がんばる先生支援事業」申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究 (2年目)
2	研究テーマ	<p align="center">「新しい時代を生きる子どもに必要な資質・能力の育成」 ～ 2030年学習指導要領に向けての基礎研究 ～</p>			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を項立てして記載してください。</p> <p>(1)次期学習指導要領を見据え、今後子どもに求められる資質・能力を育てる新たな指導・支援の方法を調査・研究する。</p> <p>(2)子どもの実態や資質・能力の課題をもとに、各自で研究テーマを選択し、新たな指導・支援の方法で授業を実践する。</p> <p>(3)授業実践の成果と課題を振り返り、子どもの資質・能力の向上につながっているか検証する。</p> <p>なお、本研究では、昨年度までの取組みを下地にし、子どもの実態をもとに教員自身が主体的に課題解決に取り組むよう「ボトムアップ型」の研究を進め、研究活動に主体的に取り組む教員集団の形成を図るとともに、子どもの資質・能力向上につなげていく。</p>			
4	研究内容	(1)研究内容の詳細 ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する			
		研究の方向性	深い学びの実装		
		<p>○本校の現状と課題</p> <p>2030年に学習指導要領の改訂が予定されている。社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となっている時代に生きる子どもたちに、新しい時代に必要な「資質・能力」を育成するための手立てが検討されているところである。</p> <p>本校の児童に目を向けてみると、全国学力・学習状況調査において国語・算数の両教科ともに平均正答率は全国平均を上回っており、「読む力」「書く力」等に日常授業の改善の成果が表れつつあると言える。また、児童質問「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え工夫することはできているか」という自己選択・自己決定に関わる質問項目で、肯定的な回答が94%を超えるなど、自分で学びを進める土壌が整ってきている。しかしながら、正答数分布グラフの傾向は、両教科ともに学力中位層の子どもが大半である。学力上位層の向上については大きな伸びは見られず「個別最適な学び」や「協働的な学び」等の促進が不可欠である。</p> <p>そこで、今年度より2030年を見据えながら「個別最適な学び」「協働的な学び」等、子どもの実態や課題に応じた研究・実践を日々の授業から進めていく。</p> <p>○研究の進め方</p> <p>①年度当初に各研究グループでテーマを選択する。テーマを選択する際には、各学年の子どもの実態や課題を重視する。選択したテーマについては、各自、文献等で内容を深めるとともに「具体的な取組み」を立案する。</p> <p>②「具体的な取組み」に基づいて、日々の授業で計画的に実践を行う。(教科・領域は固定しない。)</p> <p>③年間で全体授業研究会を6回実施し、各研究グループのテーマに基づいた教材研究、指導法、評価のあり方を明らかにする。</p> <p>④研究授業や1人1授業では、「具体的な取組み」に基づいて提案したり、進捗状況を共有したりして、学校全体で深める。</p> <p>⑤1～2学期に学習会として外部講師を招いたり、研究会に参加したりして研究を深める。</p> <p>⑥2学期終了後、研究成果と課題、改善策をグループごとにまとめるとともに、3学期に研究報告会を開催し、全市向けに研究の成果と課題を報告する。</p> <p>○グループ研究のテーマ</p> <p>次期学習指導要領のポイントとなる内容から、本校の子どもたちの資質・能力に関わる課題や本校教員の授業の改善点となるテーマを6点設定した。</p> <p>A「社会に開かれた教育課程」 B「探究学習」 C「個別最適な学び」 D「協働的な学び」 E「デジタル学習基盤」 F「自己調整学習」</p> <p>このように、次期学習指導要領を見据えながら、子どもたちの実態や課題に応じた研究・実践を日々の授業から進めていく。</p>			
		(2)継続研究 [2年目] ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する			
<p>研究1年目を終え、子どもの実態から出発し、各学年が主体的にテーマを設定して研究を進めるボトムアップ型の研究体制を構築した。その結果、教職員一人一人の主体的な参画と協働が促され、研究の過程そのものが教職員の資質・能力の向上につながった。また、子どもたちの主体的な学びを支える基盤の形成にも寄与することができた。</p> <p>一方で、学年ごとの実践が充実してきた反面、学校全体としてどのような子ども像を目指すのかという共通理解や明確化は十分とは言えず、学校全体の取組として研究をさらに深めていく点が課題として明らかになった。</p> <p>今後は、「学校として育てたい子ども像」を明確にし、全ての学年の取組がその実現に向けて有機的につながるよう、研究の柱を整理していく必要がある。昨年度の成果と課題を踏まえ、築いた土台を大切にしながら、今年度は学校全体としての共通目標のもと実践をさらに深化させ、子どもたちの主体的・対話的で深い学びの一層の充実を図っていく。</p>					
(3)継続研究 [3年目]					

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none">・4月：これまでの研究の経緯や、昨年度の子どもの実態や資質・能力の課題をもとに、学校全体の研究計画を立案する。併せて、「授業を通してめざす子どもの姿」を全教員で策定する。・4～5月：年度当初に各研究グループで、A「社会に開かれた教育課程」、B「探究学習」、C「個別最適な学び」、D「協働的な学び」、E「デジタル学習基盤」、F「自己調整学習」の中からテーマを選択する。テーマを選択する際には、各学年の子どもの実態や課題を重視する。選択したテーマについては、各自、文献等で内容を深めるとともに、「具体的な取組み（授業をどのように工夫するのか）」を立案する。・5～2月：「具体的な取組み」に基づいて、「主体的、対話的で深い学び」を基本とした日々の授業で計画的に指導や活動を実施する。・5～2月：各研究グループが立案した「具体的な取組み」に基づいた授業実践の充実のため、独自の教材・資料・掲示物等を作成する。・5～7月：ティーチング・エンパワーメント事業のスクールアドバイザーに、「主体的、対話的で深い学び」を基本とした授業改善の視点と具体策について、今後の方向性についての示唆をいただく。・8～2月：外部講師に、研究テーマに基づいた授業改善の視点と具体策について、今後の方向性についての示唆をいただく。・6月～1月：授業改善計画をもとに授業実践を行うとともに、他校の公開授業や研究発表会に参加し、自身の授業実践を改善する機会とする。・7月～1月：スクールアドバイザー及び外部講師から示唆をいただいた指導法や、他校の実践から取り入れた指導法により、各グループが立案した「具体的な取組み」に基づいた授業実践を行う。この間に全教員が1回以上の公開授業を実施し、更なる指導法改善策を協議し、整理するとともに、スクールアドバイザーの指導を受ける。・10月：校内アンケート（中間）を実施し、研究の進捗状況を確認する。・12月～1月：研究成果と課題、改善策をグループごとにまとめるとともに、3学期に開催する研究報告会に向けての準備を行う。・1月：校内アンケート（期末）を実施し、研究の成果と課題を明らかにする。・1月：1年間の研究の成果と課題を研究資料にまとめる。・2月：研究報告会を実施し、1年間の研究について報告し、参観者による研究協議、外部講師やスクールアドバイザーによる講評・助言の後、次年度に向けての課題を整理する。 <p>出張を伴う研究会への参加、外部講師を招聘する研修会の実施等、経費執行が必要な取組内容を記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none">・次期学習指導要領に向けての研修講師 早稲田大学 大村龍太郎 准教授（2回）・授業研究指導講評 大阪教育大学 住田 勝 教授 愛媛大学教育学部 井上昌善 准教授・「全国小学校社会科教育研究協議会研究大会 徳島大会」「全国小学校理科研究協議会研究大会 千葉大会」「岡山大学附属小学校 研究発表会」「奈良女子大学附属小学校 研究発表会」等に参加し、情報収集した内容を研究や日々の授業実践に反映させる。□
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>(1)継続研究（2年目、3年目）において検証方法の変更の有無を記入してください。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 変更しない。理由 <input type="checkbox"/> 変更する。</p> <p>(2)大阪市教育振興基本計画に示されている、「<u>子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力</u>」の育成および、「<u>教員の資質や指導力</u>」の向上について、それぞれ見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。（いずれかに<input checked="" type="checkbox"/>を入れてください）</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>多様な他者との交流を通して、よりよい学びを生み出し、必要な資質・能力を育成する。また、子ども一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出していくようにするための実践研究に取り組む。</p> <p>《検証方法》 校内調査における「授業では、課題を、学級の友達と話し合って学習することがよくある」に対して、最も肯定的な回答をする児童の割合を前年度以上にする。【R7:70%】</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>子どもの多様な特性を尊重し学習意欲を引き出すことを目的として、子ども自身が自分で問題を設定し、その問題を解決するために協働しながら進める学習活動や、子ども一人一人の学習進度や個性に合わせた学習活動を実践することで、子どもが自己の可能性を最大限に引き出すことを目指す。</p> <p>《検証方法》 校内調査における「授業では、自分からすすんで学習にとりくんでいる」に対して、最も肯定的な回答をする児童の割合を50%以上にする。【R7:45%】</p>

<p>6</p>	<p>見込まれる成果とその検証方法</p>	<p>【見込まれる成果3】 <input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上 子どもの実態をもとに教員自身が主体的に課題解決に取り組むよう「ボトムアップ型」の研究を進め、研究活動に主体的に取り組む教員集団の形成を図る。</p> <p>《検証方法》 教職員アンケート「今年度の研究は主体的に取り組む、研究内容を深めることができた」に対する肯定的な回答の割合を85%以上にする。【R7:昨年度100%】</p> <hr/> <p>【見込まれる成果4】 <input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上 日々の教育活動を通してICT機器を活用し、子どもにとってわかりやすく楽しく学べる授業を実践する。</p> <p>《検証方法》 校内調査における「授業では、一人一台パソコンを使っている」に対して、最も肯定的な回答をする児童の割合を80%以上にする。【R7:77%】</p>						
<p>7</p>	<p>研究成果の共有方法</p>	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="535 1104 1662 1185"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 2 月 3 日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立野田小学校</td> </tr> </table> <p>◆【必須】 waku².com-bee掲載による共有</p> <p>○掲載の日程（予定）</p> <table border="1" data-bbox="535 1279 1163 1360"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 2 月 19 日</td> </tr> </table> <p>◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 8 年 2 月 3 日	場所	大阪市立野田小学校	日程	令和 8 年 2 月 19 日
日程	令和 8 年 2 月 3 日	場所	大阪市立野田小学校					
日程	令和 8 年 2 月 19 日							
<p>8</p>	<p>代表校園長のコメント</p>	<p>1. 新規研究（1年目） 昨年度まで、令和3年1月に出された中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の2本柱「個別最適な学び」「協働的な学びの実現」に焦点を当てて社会科・生活科を中心に授業改善に取り組んできた結果、一定の成果が見られた。 今年度は、昨年度の研究を発展させるとともに、教員自身が主体的に研究に取り組むようにすることを重視し、内容選択型の研究に取り組むことにした。特に、外部講師に研究テーマに基づいた授業改善の視点と具体策について示唆をいただくとともに、他校の公開授業や研究発表会に積極的に参加するよう促すことで、教員自ら学ぶ意欲に火を灯し、自身の授業実践を改善する機会とした。教員自身が主体的に研究活動に取り組むことで、より一層教職員が一丸となって研究を推進するとともに、授業改善による子どもの育ちと教員のスキルアップがスパイラルに伸びていくことを期待している。その結果として、2030年代以降の時代を力強く生き抜き未来を切り拓くことのできる子どもを育てていければと考えている。</p> <p>2. 継続研究（2年目） 昨年度は、子どもの実態を基盤としたボトムアップ型の研究により、教員一人一人の主体的な参画と協働が進み、授業改善と教員の資質向上の両面で確かな成果を上げることができた。また、子どもたちにおいても、主体的に学びに向かう姿勢の高まりが見られ、研究の有効性を実感している。 今年度は、これらの成果を確かな土台とし、「育てたい子ども像」を全校で明確に共有した上で、すべての実践を有機的に結び付け、研究をさらに深化させる。とりわけ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に推進し、子ども一人一人が自己の学びを調整しながら、より深く学び続ける力の育成を図る。 教職員が主体的に学び続ける組織として研究を推進し、その成果を広く発信することで、変化の激しい時代を力強く生き抜き、未来を切り拓く子どもの育成につなげていきたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>						